

ネガティブな出来事に対する原因帰属

—対処行動および問題解決スタイルとの関係—

三宅幹子

Causal attribution of a negative event

—Relations of coping behavior and problem-solving style—

Motoko Miyake

Relations of causal attribution of a negative event to coping behavior and problem-solving style were examined. A negative event was described and 117 undergraduates were asked to imagine themselves being faced with the event, and rate the likelihood of ten probable causes for it, how likely that they would adopt each of six items of coping behavior, and the seriousness of the event. In addition, they filled the Problem-Solving Inventory (PSI) to assess their problem-solving style. Sixty-nine students who rated the seriousness of the event as fairly to very serious were selected for further analyses. Result showed that regardless of causal attribution, the “make-more-effort” coping behavior was highly selected. The other coping behavior items and problem-solving style were showed the relations to causal attribution. To examine in detail, classify the causal attribution into the types and discussed the relations of causal attribution types to coping behavior and problem-solving style.

Key words: causal attribution of a negative event, coping behavior, problem-solving style

キーワード：ネガティブな出来事に対する原因帰属，対処行動，問題解決スタイル

目次

I. 問題と目的

II. 方法

III. 結果

IV. 考察

V. 引用文献

1. 問題と目的

原因帰属とは、身の周りに起こるさまざまな出来事や自己あるいは他者の行動に関して、その原因を推論することをいい、そのプロセスは帰属過程と呼ばれる。Wong and Weiner (1981)によれば、われわれは意外な出来事を経験したり、何らかの課題に失敗したり、あるいは自分にとって重要な出来事を経験したときに、より積極的にその原因を求めるといふ。意外な出来事を経験すれば、人は探索行動をとることによって、その結果が生じた環境と自己の状態とを正確に理解し、その環境に適応しようとするであろう。また、失敗の原因がどこにあるのかを正確に知ることは、さらなる失敗を避けるために大きな効果をもつ。特に、ネガティブな事態の場合には、その原因について深く考え、その後の対処行動を探るであろう。そして、同じように失敗を経験していても、それをどのように原因帰属するかによってその後の対応の仕方は異なってくる。こういった意味で、原因帰属はその後の行動を方向付けるものであるといえる。

学校教育場面を例にとると、テストの結果の良し悪しは日常の学習（達成行動）のフィードバックであるといえるが、テストでの低い点数に対して、ある生徒は「今回は、遊びすぎたから点が悪いのだ」と解釈し、別の生徒は「頭が良くないんだからこんなものだ」と解釈するかもしれない。生徒がテストの原因をどのように捉えるかによって、その生徒の経験する感情や、その後の期待や達成行動は大きく異なるであろう。すなわち、その出来事の原因を、努力不足などの自分の力で統制可能な要因へ強く帰属した場合には、今後はもっと努力することによってその事態を避けることができると考え、失敗を避けるためにより努力するであろう。一方で、自分の能力不足が原因であると考えれば、どうしようもないこととあきらめて無気力な状態に陥るかもしれない。このように、特にネガティブな出来事に直面した場合には、それをどのように原因帰属するかが、その後の期待や感情、対処行動にとって非常に重要である。Forsyth and McMillan (1981)によれば、努力のように、内的で統制可能な要因への原因の帰属は、その後の達成期待の高さと強く関係しており、外的で統制不可能な要因への原因の帰属は、以後の期待を低めることと関係していたという。

本研究では、特にネガティブな出来事に対する原因帰属の仕方に焦点を当て、ネガティブな出来事に対する原因帰属とその出来事への対処の仕方との関連を検討する。また、その際、当該出来事に対する対処の仕方だけでなく、個人の問題解決スタイルとの関係についても検討する。問題解決スタイルとは、D'Zurilla (1986)によれば、社会や日常生活の中での諸問題に対して効果的なコーピング方法を見つける、認知—感情—行動プロセスにおける個人のスタイルといえることができる。ただし、ここでは積極的な問題解決スタイルを持つか否かという点を問題とし、どのような原因帰属の仕方がより積極的な問題解決スタイルと結びつくのかという点

に焦点をあてて検討する。

また、より実態に迫るために、原因帰属パターンのタイプ分けを試み、原因帰属パターンのタイプと、対処行動および問題解決スタイルとの関係についても検討を加えることとする。

II. 方法

1. 調査参加者と調査の実施

1) 調査参加者

大学生 117 名（男性 35 名，女性 82 名；平均年齢は 21.2 歳）が調査に参加した。

2) 調査の実施

場面想定法を用いた、無記名式の質問紙形式の調査を講義時間中に集団で実施した。調査実施時期は 2001 年の 12 月であり、所要時間は約 10 分間であった。

2. 質問紙の構成

質問紙の構成は、ネガティブな出来事を説明する文章とその場面についての評定項目（原因帰属，対処行動，出来事の重要性）とのセットが 1 つと，積極的問題解決スタイルを測定するための，問題解決スタイル調査項目（Problem-Solving Inventory；PSI）の下位尺度であった。それぞれ，以下のようになっていた。

1) ネガティブな出来事を説明する文章とその場面についての評定項目

ネガティブな出来事を説明する文章 大学生が日常生活において経験する可能性の高いネガティブな出来事として，重要なレポートに低い評価をつけられる場面（Table 1 に示す）を提示し，自分がこの場面に直面していることを想定しながら読み，あとの各項目に評定するように求めた。

原因帰属の評定項目 Hayamizu (1997)，荒木 (2000)，荒木・大橋 (2001) を参考に，「①能力が足りなかった」，「②努力が足りなかった」，「③自分にとってはレポートの課題が難しかった」，「④運が悪かった」，「⑤レポートへの取り組み方が悪かった」，「⑥担当教官が悪かった」，「⑦レポートのテーマに対する興味がなかった」，「⑧体調が悪かった」，「⑨時間が足りなかった」，「⑩やる気がでなかった」の 10 項目を提示し，場面のようになった原因としてそれらの項目がそれぞれどの程度影響していると思うか，「非常に影響している(5)」から「全く影響していない(1)」までの 5 件法で評定を求めた。

対処行動の評定項目 Hayamizu (1997) を参考に，「①なにか，気晴らしになることをする」，「②次回のレポートが課されたら，レポートをしあげるのに，今回よりもっと努力することにする」，「③今後，このようなレポートが課される講義は，なるべく選択しないようにする」，

「④次回のレポートにはどう取り組んだらいいか、対策を良く考える」、「⑤評価が低かった理由をはっきりさせようとする」、「⑥嫌なことなので、あまり深く考えないようにする」の6項目を提示し、「非常にそう思う(5)」から「全くそう思うと思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。①、③、⑥は比較的消極的な対処行動であり、②、④、⑤は比較的積極的な対処行動である。

出来事の重要性の評定項目 説明文のような場面について、「どの程度深刻であると思いますか」との項目に、「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。

2) 積極的問題解決スタイルの測定項目

Hepner & Petersen (1982) が開発した社会的問題解決のスタイルを測定するための尺度(問題解決スタイル調査項目; Problem-Solving Inventory; PSI) から、積極的な問題解決のスタイルを測定する下位尺度である「接近一回避スタイル」(18項目)を用いた。項目は、丸山(1995)によるD'Zurilla(1986)の邦訳を一部修正した、杉浦(2001)のものを使用した(項目例:「複雑な問題にぶつかったとき、何が問題なのかその本質を明らかにするために情報を集める戦略を立てる」、「問題を解決した後で、何がうまくいき、何がうまくいかなかったのか分析をする」)。「そう思う(5)」から「そうは思わない(1)」までの5段階で評定を求めた。

Table 1 場面想定法で用いた、ネガティブな出来事を説明する文章

必修の授業の成績に影響する重要なレポートが返却された。自分のレポートの評価は低く“C”であった。まわりの友達も、ほとんど“A”であり、彼らの評価と比べてみても、自分のレポートの評価は、かなり低かった。

III. 結果

各評定値は、厳密には順序尺度上の数値であるが、便宜的に間隔尺度上の数値とみなして以下の分析を行う。

原因帰属の10項目に対しては、回答に欠損値の無い111名(男性34名、女性77名;平均年齢は21.2歳)のデータを対象に、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、固有値の推移と因子の解釈可能性から4因子解を採用した(累積寄与率は45.5%)。各因子に属する項目とその因子負荷量をTable 2に示す。各因子に負荷する項目については、負荷量の絶対値が.40以上であり、2つ以上の因子に高く負荷していないことを基準として判断した。また、それを満たさなかった1項目(「⑦興味」)は削除した。各因子に負荷する項目の評定値の平均

値を因子得点とし、以後の分析はこれを用いて進める。

また、調査参加者のうち、回答に記入漏れ等の不備がなく、かつ、出来事の重要性を問う項目において「わりとそう思う(3)」以上に評定した 69 名（男性 19 名、女性 50 名；平均年齢は 21.2 歳）のデータを抽出して、これ以後の分析の対象とした。

1. 原因帰属と対処行動、問題解決スタイルとの関係

原因帰属の各因子得点、対処行動および問題解決スタイルの評定値の平均値と標準偏差を Table 3 の上端および左端に、また、原因帰属の各因子と、対処行動および問題解決スタイルとの相関係数をその内側に示す。

Table 2 原因帰属項目に対する因子分析結果

因 子	項 目	因子負荷量 ^a
F1 能力要因	③自分にとってはレポートの課題が難しかった	.93
	①能力が足りなかった	.53
F2 統制可能要因	⑤レポートへの取り組み方が悪かった	.73
	②努力が足りなかった	.62
	⑩やる気がでなかった	.43
F3 外的要因	⑥担当教官が悪かった	.67
	④運が悪かった	.59
F4 偶発的要因	⑧体調が悪かった	.75
	⑨時間が足りなかった	.49

^a それぞれ、F1～F4 の各因子への負荷量。

Table 3 原因帰属と対処行動、問題解決スタイルの相関係数 (N=69)

	原 因 帰 属				
	F1 能力 [3.8(0.6)]	F2 統制可能 [3.9(0.7)]	F3 外的 [2.3(0.8)]	F4 偶発的 [2.7(0.8)]	
対処行動					
②もっと努力	[4.0(0.9)]	-.05	.03	-.07	.19
④対策	[3.1(1.1)]	.08	.09	.25 *	.31 *
⑤理由をはっきり	[3.1(1.1)]	.05	-.16	.18	.30 *
①気晴らし	[3.4(1.1)]	.22 +	.22 +	-.03	.23 +
③選択しない	[2.4(1.0)]	.42 *	.34 *	.23 +	.18
⑥考えない	[3.0(1.1)]	-.07	.25 *	.03	-.10
問題解決スタイル	[71.7(9.2)]	.16	.10	.33 *	.29 *

[]内は、平均値 (SD). * $p < .05$, + $p < .10$

因子得点、項目表定値の平均値をみると、原因帰属においては、F1 能力要因、F2 統制可能要因の因子得点が高く、F3 外的要因や F4 偶発的要因の得点は低めである。また、対処行動においては、「②もっと努力」が非常に高く、「①気晴らし」もある程度高めである。「③選択しない」のみが中間点（5段階評定なので3）を下回っていた。

相関係数については、F1 能力要因は、「③選択しない」との間の相関が有意であった。能力という、固定的で自分の力では統制不可能な要因に原因を帰属しているほど、回避的な対処行動を選びがちになるのであろう。また、「①気晴らし」との間の相関も有意となる傾向がみられている。F2 統制可能要因は、消極的な対処行動3項目との間に相関が見られており、取り組み方や努力・やる気における問題が原因であると強く感じているほど、「③選択しない」や「⑥考えない」といった消極的な対処行動を取りがちであった。F3 外的要因は、「④対策」および問題解決スタイルとの間の相関係数が有意であり、F4 偶発的要因は、「④対策」、「⑤理由をはっきり」、問題解決スタイルとの間の相関係数が有意であった。F3 外的要因と F4 偶発的要因は、F1 や F2 に比べて評定値の平均値が低く、比較的選択されにくい要因であるといえるが、これらの影響を強く認識している者ほど、「④対策」や「⑤理由をはっきり」といった積極的な対処行動をとりがちで、問題解決スタイルも積極的であるという結果であった。

2. 原因帰属タイプと対処行動、問題解決スタイルとの関係

原因帰属のタイプ分類 原因帰属の4因子の因子得点に基づいて、クラスター分析（ワード法）を行った。その結果、併合距離 6.13 以上で区分された、4つのクラスター（CL1, CL2, CL3, CL4 とする）をタイプ分けの基準として採用した。それぞれの人数、および原因帰属の因子得点の平均値を Table 4 の上部に示している。さらに、各クラスターの特徴をわかりやすくするために、因子得点を標準化した値（標準得点）の平均値を Figure 1 に示している。

それぞれの特徴をまとめると、CL1 は、F2 統制可能要因に特に強く帰属するタイプの群であり、ネガティブな出来事の原因は自分の努力不足や取り組み方のまずさ、やる気の欠如にあるという見方をするタイプの群である。CL2 は、すべての要因に対して高めの評定をしており、ネガティブな結果を招いたことについて、多くの要因の影響を認めるタイプの群である。また、CL3 は、F1 能力要因へ強く帰属しており、ネガティブな出来事の原因は自分の能力不足にあるという見方をするタイプの群である。CL4 は、全体的に評定値が低く、最も評定値の高い F2 統制可能要因においてかろうじて平均点が中間点（3）に達しているものの、その他の3因子の平均点はすべて中間点を下回っている。はっきりとした原因を思い浮かべられない、原因を明確に想定できていないタイプの群であるということができよう。

Table 4 クラスター (CL) 別原因帰属, 対処行動, 問題解決スタイル平均値 (() 内は SD)

	CL1 (n=28)	CL2 (n=9)	CL3 (n=19)	CL4 (n=13)	F(3, 65)	多重比較
原因帰属						
F1 能力	3.9(0.5)	4.2(0.5)	4.1(0.5)	2.9(0.3)	21.64*	2,3,1 > 4
F2 統制可能性	4.4(0.4)	4.3(0.5)	3.5(0.4)	3.1(0.6)	29.42*	1,2 > 3,4
F3 外的	2.0(0.6)	3.7(0.6)	2.0(0.5)	2.4(0.9)	19.08*	2 > 4,1,3
F4 偶発的	2.9(0.7)	3.7(0.7)	2.1(0.6)	2.5(0.8)	10.50*	2 > 1 > 3; 2 > 4
対処行動						
②もっと努力	3.9(0.8)	4.2(0.6)	3.8(1.1)	4.2(0.9)	0.65	
④対策	3.1(1.2)	3.8(0.8)	3.0(0.9)	3.0(1.0)	1.24	
⑤理由をはっきり	2.7(1.2)	4.0(0.8)	2.9(1.0)	3.3(0.9)	3.64*	2>3,1
①気晴らし	3.5(1.0)	3.9(1.2)	3.2(1.2)	3.2(1.0)	1.05	
③選択しない	2.5(1.0)	2.9(0.9)	2.3(0.7)	2.0(1.1)	1.74	
⑥考えない	3.2(1.0)	2.8(0.9)	2.5(1.0)	3.2(1.2)	1.96	
問題解決スタイル	70.9(7.5)	79.1(7.7)	69.9(7.8)	71.0(12.6)	2.37+	2 ≥ 3 ^a

* $p < .05$, + $p < .10$ ^a クラスターの主効果は有意傾向 ($p < .10$) であったが, 多重比較を行った.

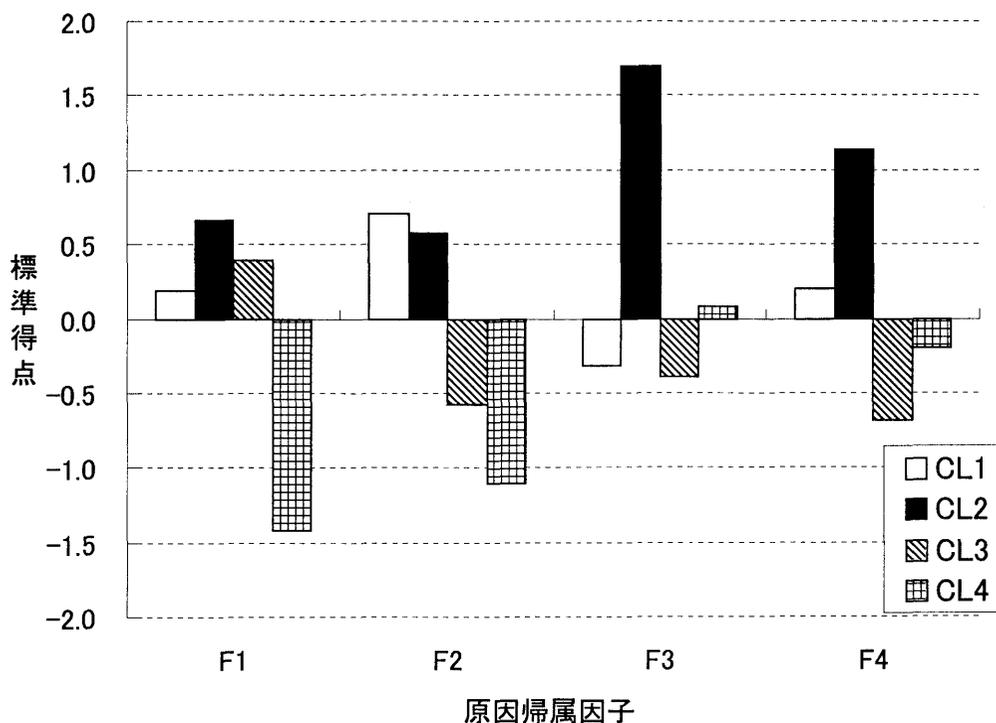


Figure 1 クラスター(CL)別原因帰属因子得点(標準得点化済み値)

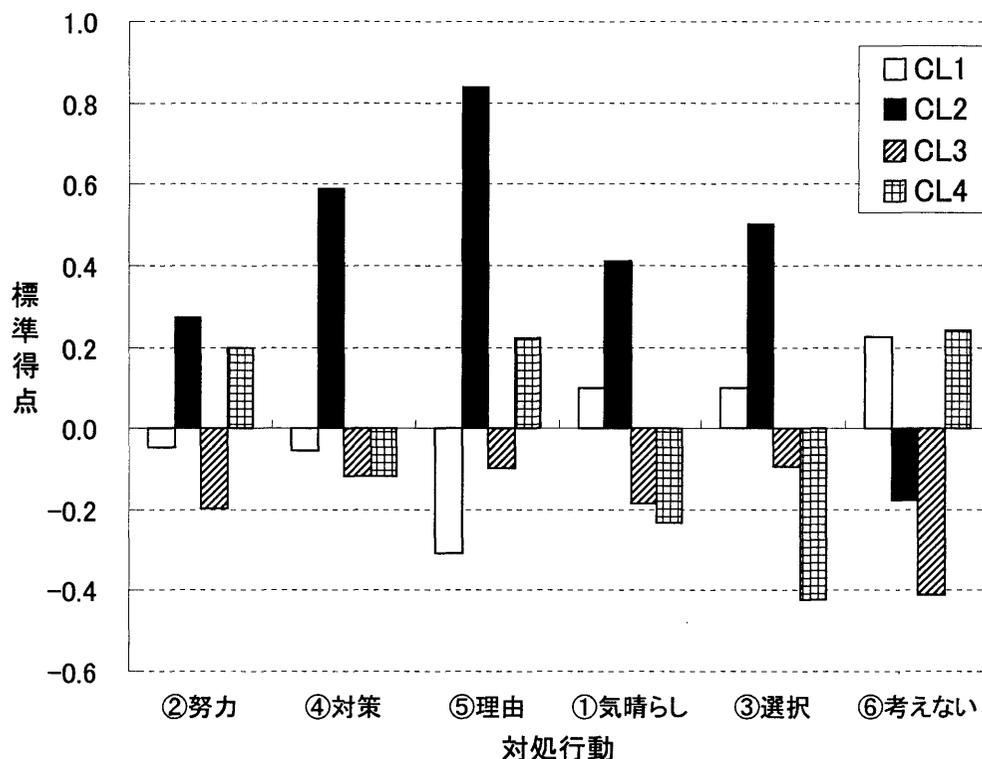


Figure 2 クラスタ(CL)別対処行動評定値(標準得点化済み値)

原因帰属タイプと対処行動, 問題解決スタイルとの関係 クラスタごとの対処行動, 問題解決スタイルの平均値を Table 4 の下半分に示す. また, 対処行動については, Figure 2 に評定値を標準化した値(標準得点)の平均値を図示している.

すべてのクラスタにおいて, 一貫して「②もっと努力」の評定値が高い. また, 全体的に, 「②もっと努力」, 「④対策」, 「⑤理由をはっきり」といった積極的対処項目のほうがそれ以外の消極的な対処項目に比べ, やや高めの評定値になっている.

各クラスタの平均値を比較してみると, 「⑥考えない」を除くすべての対処行動において, CL2 が最も高い値を示していた. さらに CL2 は, 問題解決スタイルにおいて他のクラスタよりも積極的であった. 逆に, CL3 では, すべての項目において評定値が低く, 半数の項目で最低の値である. CL1 では, 「②もっと努力」, 「④対策」, 「⑤理由をはっきり」といった積極的な対処項目では平均以下(標準得点がマイナスの値)であり, 逆に「①気晴らし」, 「③選択しない」, 「⑥考えない」といった消極的な対処項目では平均以上(標準得点がプラス)となっ

ている。どちらかという、積極的な対処行動よりも消極的な対処行動のほうが抵抗が少ないのであろう。CL4は、「②もっと努力」や「⑤理由をはっきり」といった現実的で積極的な対処をしつつも、「⑥考えない」のように、精神的な苦痛を避けようという群であろう。CL1、CL3、CL4の問題解決スタイルについては大差ない。

平均値の差の検定（一要因分散分析，多重比較）の結果（Table 4の右端を参照），統計的に差が有意であったのは、「⑤理由をはっきり」におけるCL2とCL1，CL2とCL3の間であった。また，問題解決スタイルにおいて有意傾向がみられたので（ $p < .10$ ），これについても多重比較を行ったところCL2とCL3の間に差の傾向がみられた。

各クラスターの人数の少なさやばらつきから，統計的な差ははっきりと示されなかったのであるが，各群の特徴をやや強調して，原因帰属タイプと併せて簡潔にまとめると以下のようなになる。まずCL1は，F2統制可能要因に特に強く帰属するタイプであるが，それと同時にF1能力要因への帰属も高めである。対処行動においては積極的な対処行動の評定値はさほど高くはなく，他クラスターとの比較で言えば，むしろ消極的な対処行動に親和性があると考えられる。CL2は，原因帰属においては多くの要因の影響力を認め，対処行動と問題解決スタイルにおいては，多くの対処行動に対しそれを行おうという意味を示し，問題解決スタイルも積極的であった。CL3は，F1能力要因に強く帰属しており，対処行動を取ろうとする意欲はどの方法についても低めである。CL4は，明確な原因を想定できていないタイプであり，対処行動においては現実的・積極的な方法で対処しようとしつつも，嫌な事について深く考えてみるなどの精神的な苦痛は避けようというタイプである。

IV. 考察

1. 原因帰属と対処行動，問題解決スタイルとの関係

原因帰属と対処行動，問題解決スタイルとの相関係数の分析からは，当初想定していたような，統制可能な要因への原因帰属と積極的な対処方法との結びつきは実証されなかった。むしろ，積極的な対処方法との間に有意な相関係数がみられたのは，「教師」や「運」といった外的要因や，「体調」や「時間」といった偶発的要因であった。

統制可能要因への帰属と積極的な対処行動との間に有意な相関係数がみられなかったことについては，これらの項目では多くの者が高い評定値に集中したため，線形の対応関係の指標である相関係数は有意にならなかったと考えられる。しかし，それは方法論的，統計的な問題だけでなく，統制可能要因への帰属（特に努力帰属）について本質的なところから問い直す必要を示しているのかも知れない。すなわち，原因帰属タイプ（クラスター）の分析において，統制可能要因に強く帰属していたクラスター（CL1）は，積極的な対処行動にはさほど高い評定

値を示してはいない（他クラスターとの比較を踏まえて見れば、むしろ消極的対処行動のほうに傾斜しているといえるかも知れない）。学校教育の中で達成結果の努力帰属が強力に奨励されてきたという背景を踏まえて考えると、このクラスターでの統制可能要因への帰属の実態は、“とりあえず”努力に帰属しておくという、習慣あるいはたてまえとしての努力帰属なのかもしれない。統制可能要因での高い評定値への集中がこのような実態によるものであるなら、統制可能要因への帰属について、その意味を再度見直す必要がある。

また、積極的対処行動と外的要因、偶発的要因との関連についても、原因帰属タイプの分析から1つの示唆が得られる。すなわち、原因帰属において多くの要因の影響を認め、多様な対処行動をとろうとする傾向を示すクラスター（CL2）の存在は、どの要因に帰属するかということだけでなく、いろんな原因を考えてみることで、あるいはバランスの取れた原因帰属を行うことが効果的な対処行動に繋がる可能性を示すと考えることができる。

2. 原因帰属タイプと対処行動、問題解決スタイルとの関係

原因帰属タイプと対処行動、問題解決スタイルとの関係の分析では、調査参加者は4タイプ（クラスター）に分類された。統計的にはタイプ間の差異がはっきり示されたとは言いがたいが、各タイプの特徴を踏まえて、原因帰属タイプと、対処行動および問題解決スタイルの間関係を考察してみると、上記のように、相関関係の分析を補充できる可能性が示され、線形関係を仮定した分析と質的な分析を併用することの有用性が示唆されたのではないだろうか。また上述の2点につけ加えるならば、この分析から、ネガティブな出来事を能力に帰属することのリスクの大きさも示唆される。すなわち、能力要因への帰属が比較的強かったクラスター（CL3）は、対処行動を取ろうとする意欲はどの行動についても低めであった。ネガティブな出来事への能力への帰属、特に本研究で扱った学業的領域の場合にはそのダメージも大きく、対処行動にもかなり阻害的に影響することが想定される。

最後に、本研究の問題点と今後の課題について述べる。本研究では、調査参加者数が少なく、そのため分析方法や統計的検定の検定力が制限されていた。原因帰属における性差を報告する研究もあることから（たとえば、Beyer, 1999/1998）、本研究でとりあげた問題についても男女別の検討を行ってみる必要がある。また、各クラスター内での要因間の関連についての分析も興味深い。そのような部分については、データ数を増やして検討を進める必要がある。また、本研究結果は場面想定法を使用して得たものであり、実体験に比べると現実味が薄いというこの手法の問題点は無視できない。ある程度以上の重要性を感じている参加者のデータのみを分析に使用するという配慮も1つの対応策ではあるが、より実態に迫れる研究方法を取捨選択していく必要がある。

V. 引用文献

- 荒木由紀子 2000 原因帰属の多様性が学習性無力感に与える効果について 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, 366.
- 荒木由紀子・大橋智樹 2001 中学生における学習性無力感と帰属因の多様性との関連性 日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集, 647.
- Beyer, S. 1999/1998 Gender differences in causal attributions by college students of performance on course examinations. *Current Psychology: Developmental Learning Personality Social, Winter, 17*, 346-358.
- D’Zurilla, T. J. 1986 *Problem-solving therapy: A social competence approach to clinical intervention*. New York: Springer Publishing Company. 丸山 晋 (監訳) 1995 問題解決療法—臨床的介入への社会的コンピテンス・アプローチ— 金剛出版
- Forsyth, D. R., & McMillan, J. H. 1981 Attributions, affect, and expectations: A test of Weiner’s three-dimensional model. *Journal of Educational Psychology, 73*, 393-403.
- Hayamizu, T. 1997 Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. *Japanese Psychological Research, 39*, 98-108.
- Heppner, P. P., & Petersen, C. H. 1982 The development and implications of a personal problem-solving inventory. *Journal of Counseling Psychology, 29*, 66-75.
- 杉浦義典 2001 ストレス事態に関する思考の制御困難性と関連する対処方略—情報回避・情報収集・解決策産出と心配— 教育心理学研究, 49, 186-197.
- Wong, P. T. P., & Weiner, B. 1981 When people ask “Why” questions, and the heuristics of attributional search. *Journal of Personality and Social Psychology, 40*, 650-663.